

基調講演

～熟年の危機と生涯学習の処方箋～

Active Senior
(アクティブシニア)

三浦 清一郎

生涯学習・社会システム研究者

○熟年の3つの危機

まず、「心身の活力の衰退」、すなわち体力や気力の低下があげられます。反応が鈍くなり、平衡感覚が衰え、物忘れも頻繁におこります。老いに向かっていることが加齢的に「衰弱と死」に向かうのです。それに加えて、定年と共に「社会との断絶」が生じます。すなわち、「自由の刑」とでもいえるように、ある余暇時間と向き合いながら、もう自分は社会から必要とされていない「この世の無用人」となってしまう、という自覚が生じるのです。そして3つめは生き残った者の「孤立」と「孤独」との直面です。早世・長命…人生はでこぼこです。二人で友白髪と思っても人生設計が狂う場合もあるわけです。また、子どもたちも遠く家へ去り、親だけが取り残されます。

定年を迎え、ゆくりのんびりしようと思っても、いざ、その状況になると、この3つの危機に出会い、自分はいつか何のために生きているのか、何をしているのか、という思いにとられ、自分自身の意義を見失ってしまうのです。まさしくこれは、社会から必要とされなくなった者の陥る危機的なことです。

○生涯学習の処方箋

以上のように、安楽に余生を、という考えには大きな落とし穴があるわけです。では、どうしたらよいのでしょうか。

それには、頭を使い、身体を鍛え、気を使い、世の中の役に立つことをめざすことです。つまり、『読み、書き、体操、ボランティア』に励むことです。心身の機能は使わなければ衰えます。安楽に余生を、と思つたとたん、一気に心身は衰えていきます。実際、それは現在の医療費の増大に現れています。今までの発想を変え、「血縁、地縁、職縁の縁」から、「志縁」と「生涯学習の縁」へと向かってみることです。老後の安楽を拒否し、余生は悠々自適、という人生論の楽味を排しましょう。心身に絶えざる「負荷」をかけ、人生の蓄積を活かした社会貢献の努力を続けることが、熟年の活力源になるのです。そして、現役時代には、やったことのないことにも、挑戦してみることで、

…2…

○「労働」から「活動」へ

このように定年が「労働からの引退」だけでなく、「活動からの引退」にまで至った時、「老化」が加速されるのです。そうではなく、「労働の終わりは活動の終わりではない」という認識を持つことにより、心身の機能の維持と再生は可能なのです。その点からも「読み・書き・体操・ボランティア」の重要性があるのです。中でも、「ボランティア」は最も重要です。「ボランティア」とは、「活動」を意味し、そこから「社会との関係」が生まれ、「能力の発揮」が期待され、本人の存在理由が生じてくるのです。ですから、時々気が向けば、ではなく、継続することが何より必要です。

○豊津寺子屋の場合を通して

福岡県の豊津では、町長から申し出があり、増え続ける熟年が、元気に活動するための出番を作ることになりました。町長の強い協力により、学校を拠点に活動し、大きな成果が上がり、文部科学大臣からの表彰ももらえました。日常的に子育て支援を展開したこと、地域の熟年層を指導者に活用したこと、豊富な体験活動と生涯学習プログラムを展開したこと、そして官民協働の運営システムを作り上げたことなどが評価されたわけです。しかし、実際の活動の中で、表彰の対象として見落とされたものがあります。すなわち、「保育」と「教育」を統合した活動カリキュラムに明確な目的とそれに連動した指導方法があり成果を上げていることや、子育て中の女性を支援することにつながり、男女共同参画を推進していること、熟年層の生き甲斐や活力を向上させていること、そして何よりも「学校」を活動拠点にしてコミュニティスクール創造の可能性を追求していることです。

○幼老共生と「子孫」のサイクル

教育ボランティアとして、熟年が子どもの指導にあたるのが、生き甲斐や元気の源となり、しかも、これは子どもの自立や元気にもつながります。礼節を守ることや筆の持ち方など日本の文化の形を伝えることも重要な仕事です。それは同時に子育て家族への支援ともなり、感謝もされます。熟年世代が元気に活動すると、当然、医療や介護費の軽減という点においても、子どもを中心とする「サイクル」が完成するのです。予算の乏しい市町村では、「学校」を活動拠点にしたらよいのです。学校とは本来、子どものための施設であり、子どもが通うという点においても適した場所です。しかも財政の節減にもつながりますが、現状ではまだ、自治体の理解がなかなか得られません。これからの課題かと思われまふ。養育の社会化をめざすことで、国も自治体も、高齢者の社会的活躍の機会を積極的に保障すべきです。

中野 直子

インタビュー・ダイアログ

「高齢社会をどう生きるかー高齢者をどう支援すればいいの？」

三浦：テーマに関して最も関心のある問題をキーワードとしてあげてください。

長谷川：生涯学習活動プランナー養成講座を受講しながら、自分の住む地域の公民館で、シニア生涯学習「きまめき」を開講し、「健康と生きがいづくり」の仲間づくりをしています。

山口健康・生きがいづくりアドバイザー
健康生きがいづくりアドバイザー

吉富：転勤族の私はまず居心地のよい「自分の居場所」をつくることを心がけました。いろんな活動に参加することで、自分の視点を変え、自立・自律に気がつけながら認めてもらう努力をするうち仲間も増えてきました。

林：私のキーワードは「文化で長門を磨いてみせる」です。絵画クラブ、読み聞かせ、子どもの居場所作り、地域のFMでDなどの多彩な活動は、「帰って来たら踊り」、勉強し、社会的承認が私の元気を作り出しています。

高齢社会をよくする
下関女性の会(ホーモイ)代表

田中：親の介護の経験から、「全ての人が自立し、共に支えあい、安心して生きられる市民社会」をつくるために「高齢社会をよくする下関女性の会」を立ち上げました。共に支えあうシステムづくりが必要です。



多数の男性参加者に感謝!

吉富：高齢者も家族も、外からの援助、地域からの助けも受け入れるという意識化もいると思います。



山口県消費者団体連絡協議会 副会長

長谷川：長年培ってきた技術や知識を簡単に捨てないで、興味を持ったものには、自分から動き、体を動かして自分の生きがいを見つけ、仲間と手を繋ぎましょう。

田中：地域を取り戻すには、まず挨拶、声かけをし「おせっかい」おばさんとなり、会としては「介護予防のサロン」を拡大し、今後は認知症予防にも取り組めます。

生涯学習グループ
ながと徳重グループ 代表

林：寺子屋塾を準備中です。お年寄り「旬のおかず」で対話、地域新聞を毎月発行、防災予防の教室場所の把握など自分のできるところからボランティアをしていきたいです。

会場から：町内をパトロールしています。
会場から：福祉社会に男性の力を必要としています。団塊世代の力を発揮してほしいです。

津田 絨子

■会報作成の研修会開催■

三浦氏指導のもと、会報作りの一助にKJ法を学びました。知恵を集め(情報収集)、分類し、そして整理します。全員が意見や感想を出し合い、(その時は質問禁止、批判禁止、演説禁止のルールを守ります)記録します。



たくさんの意見がポストイットに

小から大グループへ整理し
タイトルをつけ発表

…3…

市大に集合! 介護予防のためのサロン

世代間交流はじまる

市大吹奏楽部演奏
聞いて、歌って 感謝!

学生と一緒にイキイキ!!



まずはストレッチからウォームアップ



健康講話

「便秘 ウーン!!」(9月)

「睡眠 秋の夜長」(10月)

「尿失禁の対策」(12月)

「転ばぬ先の知恵」(2月)



できた、できた! 上手くできた!!



お茶の接待

・お知らせ・

2007年度 第5回 総会・講演会

認知症を地域で支えあおう

— 認知症のある人の気持ちと、ご家族の思い —

講師：代表 篠原 博之 日時：2007年5月19日(土)13:30～(講演開始14:10～)
(下関市認知症を支える会) 場所：下関市社会福祉センター F3 第1会議室
キャッチボールの会

…4…



ホーモイ通信

No.2
2007.4高齢社会をよくする下関女性の会
(ホーモイ)代表 田中 隆子
TEL/FAX 0832-53-4892『日本女性会議2006しものせき』
に参画して

1) 14の分科会

保守王国と言われるここ下関では、多くの市民が「男女共同参画って何?」「日本女性会議って何?」と思っていたのではないだろうか。「果たして下関で日本女性会議を開催することができるのかしら?」いえ、だからこそ成功させなくては・・・と私の心は揺れ動きました。

実行委員会が立ち上がり、賛否両論の末「We are here」のコンセプトが決まりました。あまりにも偶然としたコンセプトなので、分科会としてはどこに着眼し特色をだしたらいいのかわかりませんでした。もちろん機軸は「男女共同参画基本法」です。

男女共同参画社会をとりまき環境が大きく変化していることを受けて、2005年12月に第2次男女共同参画基本計画が閣議決定されました。そこに着目して議論したいながら、12の分野、14の分科会を持つことに決めました。

1. 政策・方針決定過程への女性の参画
2. 労働
3. 農山漁村における男女共同参画
4. 女性への暴力
5. 健康A
6. 健康B
7. メディアと女性
8. 教育・学習
9. 地域づくり
10. 次世代育成支援
11. 女性・男性A
12. 女性・男性B
13. 国際交流
14. 歴史にみる下関の女性

2) 参加者の多い大会

内容がよく、とてもわかりやすい楽しい分科会でした。とても参考になり地域に持ち帰り実行したい。等等、各分科会の企画・運営に称賛して下さる方が多く、苦勞した甲斐がありました。

全国から集まった人々が分科会に参加され、何かを見・聞き・感動し・やる気を起こして、各地に持ち帰り行動に変えていったかと思っています。

下関市民も全国から集まった人々に接することで「男女共同参画社会」へのエネルギーを肌で感じる事ができたのではないだろうか。その感動を行動に変えていく出発点になることを願っています。

3) 『日本女性会議2006しものせき』を終えて

男・女・高齢者や障害者、どんな性の持ち主でも差別なく人権が認められ、誰もが生きやすい社会・・・私は男女共同参画社会のあり方をこう受け止めています。

この大会で3つの事を強く感じました。
① 女性の意識を変えていくことはもちろん、それ以上に男性の意識を変えていくこと

② 行政と民間の協働の難しさ

③ 男女共同参画社会に変えていくためには、まず、学習すること

一人ひとりが少しずつ思いを行動に変えていく事が一番大切だと思います。

このような大きな大会に携わることができたこと、そして実行委員、ボランティアの力を結集して無事終了できたことを感謝いたします。ありがとうございました。

分科会会長 田中 隆子



講師をかこんで (第2分科会)

参加者総数 4,027人
山口県参加者 2,031人
下関市参加者 1,354人
ボランティア 600人

パネル展示 (第8分科会)

…1…